

ファシリテーター：渋谷 英雄さん（東京メンタルヘルス・アカデミー）  
有難う御座いました。今、お話を聞いていて、一番インパクトを持っているのは、川の写真が柵で囲まれていて、川が完全に閉じられているのだな、ということを感じたことと、それから、はみ出すという、すごい言葉がキーワードだななどと思いながらお話を聞いていました。後で、子供が何を期待したのかとか、外から投げかけた山田さんが何を期待してたのか、それも、ちょっと掘り下げてお尋ねしたいなと思いました。

有難う御座いました。時間の都合もありますので、次は天沼中学校の生重さんの事例報告をお願い致します。

事例報告 - 2 『天沼中、子ども地域活動促進事業』

別紙当日レジュメ「天沼中学校区子ども地域活動促進事業」参照

報告者：生重 幸恵さん 区立天沼中学校PTA会長 学校教育コーディネータ

## 報告

### (1) 子ども地域活動促進事業とは

こんにちは、天沼中学校のPTA会長をしております、生重で御座います。松の木小さんの事例報告は、学校の主催で「地域調べ」をテーマに、地域へ働きかけたものでした、私どもが今回発表させていただきます、天沼中学校区の子ども促進事業は、地域の側で行う事業であると考えています。お手元の資料に、子ども地域促進事業という資料があります。ここで、子ども地域活動促進事業が出来上がった歴史を少し説明させていただきます。

杉並区では先ず昭和58年より、23中学校区ごとに「地域教育懇談会」が、中野区のいじめ事件をきっかけに開催され、父親母親など、主に大人への学習を行う形で平成10年度まで続きました。現在では地域教育連絡協議会として存続しています。

また、これに一部並行する様に平成7年度より「地区交流会」と言うものも開催されましたが、子どもの問題、大人の問題を分けて地域教育を考えるのは、やはり無理があると考え、平成11年度より「子ども地域活動促進事業」として再構築されて現在に至っています。

これらは従来からの、学校主導で地区の子ども大人を含めた教育を考える発想から、地域と家庭と学校が密接に交流連携することにより子どもたちの生活を守ると言う目的で地域の諸問題に関する体験学習（善福寺川流域の課題調査の結果に基づく提言を行う）や子どもたちが直接企画運営などに参加する活動（天沼中学校区の子ども地域課題を解決探求する）等のような活動に重点をおいて継続的な体験学習を実現する方向に発想転換が行なわれています。

ここにいらっしゃっている方たちは、多分、大勢の方たちが地域社会に関わっ

ている方たちだと思しますので、子ども促進事業、子促というものが、どういう成り立ちで行われているのかというのは良くご存知の方が多いかと思いますが、こういう経緯・流れの中で、平成11年度から、子ども達が自ら考え、自分達が発信して行くという、中学生として一歩進んだ地域との関わりを、一緒に考えてやってゆくという、ここの所がこの子ども促進事業の中で一番の目玉になるのではないかということです。

私どもの天沼中学校は、杉並の一番の繁華街、荻窪の駅、商店街、タウンセブン、ルミネ等を校区に含む、杉並の商業圏に校区のある中学校です。

## (2) 心に残る地域活動を探そう

その中で、子ども促進事業に取り組む時の考え方として、伝統芸能に取り組もうとか、継続的に子ども達が学習してゆけるものとか、その他バザー、食事会、ハイキング会など催事は多く行なわれているけれど何か疲れるよね、今私達が求めているのは何だろうか、この地区はサラリーマン家庭が多くやがて転勤して行く、子どもも転校する、そして商店を含む昔ながらの住民もいる、このような地域状況の中で何か後で「やった」と誇れるもの、心に残る活動、親と子ども・地域のおじさんおばさんと共にできるもの、こんなものないかなあと考え始めたのです。

よく考えると地域のお年よりと子どもたちの接点がない、中学生が顔を出す「場」と育児を終えた人たちとの接点がないと言い出した中学生がいたんです。

中学生と親、地域のおじさんおばさんと何かつながりが持てないかと意見が出たのです。何かを見つけてゆこうっていう意識があったのですが、この様な学校区のありようの中で、特に受け継いでゆく伝統芸能のようなものもなし、何をやったら良いのだろうか？という、ちょうど、その年、NHKニュースで天沼地域は、真っ赤なしるしがつきまして、最も東京で危険な街であるというニュースが流れました。

その年度位から、ちょうど各地区の小学校に防災連絡会というものが立ち上がって、その中で、地元に関わった時に、一番の担い手になるのが、お父さん達や青年達はみんな、働きに外に出ているわけですし、何かがあった時にはやはり一番体が大きくて地元に残っているのは中学生だよねと、中学生にもそういう意識を持ってもらえないものだろうかという防災連絡会の中でも随分意見がありました。

防災は、はっきり言って地味な活動ですし、日頃、自分達が何事も無く、平穩に暮らしている限り、そんなに消火器の使い方を覚えなくても、Bポンプの使い方を覚えなくても、困らないよってというような、本当はいざってという事が起こった時には、すごく困るのですが、そういう意識をなかなか持てないでいる今の子ども達、それにその親世代である我々も町会の防災訓練など休みの日の時間をさいてまで参加をしない、参加しないのは何故なのだろうという議論の中から、子ども促進事業のテーマを防災とし、継続的に地域の課題を子ども

自身が発見・学習していくことで、逆に自分達の側から発信してゆく、その地域の色々な世代の方達との繋がりも持ってゆけるのではないかと考え、活動を始めました。

うちの中学校区というのは、青少年委員さんを中心にした子ども達の活動は以前から活発に行われていまして、ボランティアなんかにも熱心な地区でもありまして、保育体験、それも一日限りではなく、継続してずっと、長いスパンで多くの子どもが活躍する活動を続けてきて、地域のバックアップも得られやすいという背景がありました。

さっきファシリテーターの先生から“苦勞”っていわれたのですが、それほど最初の出発から苦勞をしたっていうのは無いのです。一番何が苦勞だったかという、子ども達と色々な話をしてゆく、こういう地区だよねという投げかけの中で、彼らが、やってみる気になってもらわなかったら、出発できないわけです。子どもとのやりとりの難しさが苦勞だったかもしれません。

どちらかと言うと、一発イベントのような、お祭りのようなものにもっていったほうが、子ども達は楽しいし楽なのです。そこで模擬店をやったり、バザーをやったり、みんなでワーツとお客さんにいっぱい来てもらって、ワーツと盛り上がりたいて、そういうほうが子ども達も楽なのです。

それは単年度で終わる事もできるし、やったというその時の成果は、お祭りの様なものの方が実感しやすく良いのです。その中でどうやって、地道に継続した活動にもって行くかと言う、持ってゆきかた、それは数ある選択肢を投げかけて、「これって、こういう考え方もできるよ」と誘うのですが、小学生も中学生も自ら語って手を挙げて、こういうのやりたいよ、ああいうのやりたいよっていうのは、なかなか出ないのです。

ひとつものごとを引っ張りだしてゆくのも、じっと待っている時間の方が長い、待って、待って、子ども達の中から“ポツっと”こういうことも良いよねと言い出すのを待って、子ども達自らが言い出した事を実行していくという、最初の出発がちょっと大変だった。

### (3) 防災をテーマに選ぶ

それで何をやったら良いだろうか？ということで、この流れの中で、平成10年度から考え始めた、みんなで話し合い始めたのですが、私は平成11年冬の読売新聞で、阪神大震災後の主人公、剛君の視点の変化を描いたアニメ映画「地球が動いた日」を知り、早速これを鑑賞し、地域活動にはこれだと感じたので、最初にアニメの“地球が動いた日”を、子ども実行委員のみんなに見てもらったのです。

今時の子どもなので、そんなに感動しないかなと思ったのですが、身近な年齢の子ども達を主役にしたアニメーションで、やはりインパクトはかなり強く、東京にいて阪神淡路大震災を映像で見ている、やはりニュースで流れて

来るものと、自分が経験してきたもとは違うと、子ども達にとってアニメというのは、割に身近な存在で、小さい頃からずっとそういうもので育ってきている子ども達が、アニメーションを見て、その後の話し合いの中で「これって自分達だけじゃなくて皆もっともっと多くの人に見てもらいたい」と言い出してくれたのです。

そういう流れの中で、じゃあアニメを上映するのは、どこでやったら良いだろう、多く見てもらおうのだったらどうしていったら良いのだろうというのを、根気よく、みんなと話し合いをしていって、杉並公会堂でやりたいねと、うちの学校区の中に在って、一番近くて大きい処、公会堂は、ただでは借りられないよね、どこにお願いしに行けば良いのだろう、社会教育の方に相談しに行けば良いかな、とか、そういう、ひとつひとつのプロセスを積み重ねて、取り敢えずアニメ上映をしたのです。

#### (4) アニメ「地球が動いた日」上映に当たって

「子ども実行委員会内での試写会」平成12・1・11

- ・人は支え合って生きて行くことを知った
- ・より多くの人に見て欲しい、一緒に考えたい

「上映会の実施決定、多くの人に見てもらえる工夫」平成12・2・15

- ・杉並防災課へ実行委員代表3人が上映会主旨の説明と協力をお願いに
- ・チラシ、ポスター、看板づくり
- ・近隣の各小学校廻り、小学生たちへ呼びかけ

「上映会をどの様に運営するか」平成12・3・18

- ・地域の人たちと交流を図りたい
- ・各町防災会の協力を求める
- ・地震についてアンケートを作る、クイズをやる

「アニメ映画・地球が動いた日」上映と交流会 平成12・4・4

・主催：天沼中学校区地域教育連絡協議会 共催：杉並区 協賛：天沼地区町会防災会

「上映会を基に、自分たちがいざと言う時何が出来るか」

- ・この地域は消防車も入らない狭いところ多い、地域を知る必要がある
- ・住んでいる周辺の様子を把握し、いざという時どう行動すればよいか心構えしておく

それについてもチケットの作成とか、当日はどういう事をやったら良いのだろうとか、全て手作業で、今日の私の発表がハイテクを使ったものなのと全く違って、ローテクの語りだけなので申しわけないのですけれども、子ども達と積み重ねて、そういう話し合いをして、地域の中で特に青少年達が企画力と

か、実行力がすごくはっきりしていたので、しっかりした方達に恵まれた、人に恵まれたというのは大きなことだと思うのです。  
これが実を言いますと、予算が全然無いなかで50万近いお金が掛かったわけですよ。そこがやっぱり一番苦労した点かなと、それでどこからお金を出してもらおうと言って、予算が付いた、その当方で10万余、社会教育の中でも最大限出してもらっても、そんなに大したお金じゃないのです。あとを埋めていくお金をどうしたら良いのだろうかって、それを、やっぱり子どもではなく、我々、親サイドのほうで考えまして、防災会地区の方達に、皆さんがたに一口いくらでお願いしたらいかがだろうかと、ただで見てもらうためにはお金を集めなきゃならない、じゃあ、協賛金を集める為に文書を作って、青少年（その当時の青少年）のかたと、手分けを致しまして、「申し訳御座いません、天沼中学校の子ども達を含めて、近隣小の子とこういう取り組みをしてみたいと思っています、是非支援をして頂きたい」という事で、商店会長宅を一軒一軒まわって、頭を下げて歩きまして、それで協賛金を一律1万円、という形で、実にみなさん気持ち良く協力して下さったのです。2箇所くらいでしたか「商店会として、もう、さびれてしまっているんで申し訳ないけど、うちは協力できないですよ」というふうにお断りになって、それも、お互い気まずい思いをするのじゃなく「じゃあ、当日はぜひ来て下さいね」というお誘いをしながら残りのお金は全部、地域をまわって集めました。

実際、上映しまして、その時に子ども達が「ただ見てもらうのじゃなくて、自分達が地域の人達と交流を取りたい。」「アンケートで感想も聞きたいね。」という、そういう中から次にステップアップできたのです。

#### (5) 防災マップ作り

「防災マップ作りを通じてまちを歩き地域を知ろう」平成13・3・20

- ・杉並区防災課に協力を求める
- ・地域に以前から住んでいる方々と一緒に廻ることで、昔は、どの様な姿の土地だったのか、以前こんな事あったと言う話が聞けるので中学生ばかりでなく小学生も参加

「学校から支援を受け“防災塾”を開催」

「防災マップを作る為の勉強会を実施」（5回 子ども・地域住民と共に）

- ・内容の濃いものをと、市民防災研究所の協力を得る
- ・地域の人との交流、昔のまちの様子を教えて下さいと学校地域防災連絡会の協力を求める
- ・校区内の私立校とも交流を図りたい 日大二中の協力を求める

「地域を知ろう 防災マップ作り」実施 平成13・3・21

- ・天沼中、若杉小から募った子ども実行委員会が主催：270人余（17班）

・実際にまちを歩き、気付かぬ処に危険なものがある、緊急時に役立つものを気付く

- ・消火ポンプの使い方が分からない、使い方を知りたい
- ・自分たちが、救急の際、救援の手助けをしなければと思う

「まち歩きで作成したマップを整理し、完成させる」

- ・協力量校、町会にマップ配布

「各家庭に小型マップを配布」

- ・各家庭で、防災意識を高めてほしい
- ・子どもたちの考えを、防災課の協力を得て作成

「学校の協力により“普通救命救急講習会”を行なう」

- ・全校生徒が救命救急認定証を取得

「防災デイキャンプ実施を決める」

- ・マップ作り体験を通じて緊急時の対応を考え、緊急技能を体得する
- ・中学生が出来る防災訓練、救援、救護訓練の内容を知る
- ・PTAとの協力：あかりの作り方、空き缶炊飯、ペットボトル浄水装置作り
- ・消防署との協力：初期消火、応急処置、応急救護の会得
- ・実施企画案の作成と検討

「防災デイキャンプ実施」平成14・3・21を予定

その次のステップアップ、そこで終わらせないで、次の段階へ、やっぱり一生懸命やって伝えていこうというその姿の中で、自分達で感じたものが、すごくよい経験として残ったのだと思うのです。

アンケートの中のまとめも、子ども達が自ら進んでやってくれまして、そういう中で、自分達を感じた題材をまた話し合っ、更にまた発見して「地域を知るって、どういう事だろうね。」、そこで次の年の防災マップ作成というふうに繋がってゆくのです。

防災マップも本当に「色々な人に相談しようね。」、防災課の全面的なバックアップをいただいて、市民防災研究所という所もご紹介いただいて、地域町会の、本当に多くの人達に支えられた子供達、中学生がその班のリーダーで、エリアを分けてみんなで、自分達の目と手と足で地域を見て歩くという経験を致しました。

その時になって初めて、子ども達の発想の中から、こういうマップづくりが行われた。

初めての例だということで、杉並ケーブルのほうからも取材に来ていただきまして、そのあと一週間くらい天沼中学校の子ども達、近隣小学校の子ども達の様子をテレビで流していただいたのですけれども、マップを作って、また子ども

もたちは考えました。

何が足りないのだろうか「こんな危険な所がうちの街にあったのだね。」「駅前  
の放置自転車がいっぱいあるね。」「子ども達の中から、そういう色々な問題  
提起や発見があったのです。「どうしたら良いのだろうか。」「自分達にでき  
ることは何だろうか。」と。

実際この事業はまだ進行形です、今年度の3月に最終章として、子ども達の発  
案で「実際に学校に防災倉庫はあるけれども、その防災倉庫の中身は何なのだ  
ろう。どうやって使えるのだろうか。」「簡易トイレはどうやって組み立てるの  
だろうか。」「火を消すってどういう事」、自分達からの、やってみたい、経験  
してみたいというところの繋ぎ目に、丁度、そのそういう所に結びついていっ  
た。

最初の提起のところが大変だった、だけれども、その先は本当に自然に動かさ  
れるように、自分達が考えて、発見して、取り組んでゆくってという具合に、す  
ごくうまく結びついていったのじゃないかなと思っています。

今年一応、締めめの3ヵ年という事で、最後に防災デーキャンプという事で大々  
的に、一日使って、色々なことをやってみようと、アルミ缶でご飯炊いて、防  
災食のカレーを食べてみよう、簡易トイレも組み立ててみよう、学校の防災倉  
庫にあるもの全部を実体験してみよう。こういう流れの中、本当に一連の流れ  
の中で、子ども達が自ら提起して、発見して、自分達の足で考えた事が、この  
最後の年に結びついてゆく良いものになってくれるのじゃないかなと、なっ  
てほしいなと思っています。

今日、私がたまたま代表で話しているだけで、地区を取り巻く町会長さんや、  
小学校の校長先生、中学校の校長先生、そういう方達を含む実行委員会とか役  
員会とかで、全面的なバックアップがあったので、こういう成功例に結びつい  
ていったのではないかなと思います。

特筆すべきは、やはり天沼中学校で、この取り組みを全面的に学校が理解  
し、支援してくれたということで、1年目終わった年には子ども達が、防災課  
が催している防災塾っていうのがあるのですが、それを学校の、学習の中の取  
り組みとして防災塾を開催してくれて、子ども達の意識を啓発するような形に  
持って行ってくれました。

マップを作っている過程の中で全員が救命救急の資格を取りました。全校生徒  
が学校側の支援の中で、では、全校生徒に取り組ませようと、その前の年度は  
希望者だけだったのです。大人も含めて希望者がやったのですけれど、その次  
の年は全員が何かあった時に人工呼吸、大けがの応急処置ができるようにとい  
う資格を取りましょう。ここは、やっぱり全面的に学校のほうがバックアップ  
をしてくれました。

こういう活動の中で、我々大人達の願いというのは、地域の中で継続して学習

してゆく事によって、地域を愛してくれる心を育ててもらいたい、それで、異世代、お年寄りとか、つながりが持てない今の環境の中で、色々な方に知り合うきっかけを持ってほしい、街で会っても「こんにちは」という声を掛け合える人間関係をつくってほしい、この様に考えました。

これがいざ何か起きた時に一番地域を支えてゆく大きな力になってゆくのではないかということで、多くの方達の力、支援のもとで、子ども達が本当にやったのだなという、集大成みたいなものを今年やらしてもらおうかなと、小学生も中学生も、卒業していった子ども達もみんな、この企画に集まって来てくれる。

天沼中学校を中心に、その地域の方達に、中学生を中心とした子ども達の今の、ありのままの姿を分かってもらえる良い機会につながる。学校を開こう開放しようといっても、隣の家に住んでいても、実際その学校の中で、どういう子たちが生活し、学習しているかということは感じ取れる機会は少ないと思うのです。

「気軽に、いらして下さい」と言っても、用も無いのになかなか学校へは行けない、だけれどこういう活動を通して、学校がより身近に感じてもらえる、そこに生活する地域の人達全部で、学校を盛り上げていってくれるというような方向に結びついていってこれれば良いのじゃないかなって思っております。

総括として、私達、親、子どもが、この活動を行うことにより、物事を迅速に、素直に表に現して、皆で解決を図る体質になった、また、学校が積極的に地域の課題に取り組むようになった、先生方の努力などが印象に残るものでした。

簡単ですけれども、天沼中学校区の子ども促進事業は以上です。

ファシリテーター：渋谷 英雄さん（東京メンタルヘルス・アカデミー）有難う御座いました。すごいパワーを感じながら、後でその秘訣を是非お尋ねしたいなと思います。本当に地域は繋がりが無くなっちゃいましたものね、セブンイレブンへ行って毎日お弁当を買えるのは、繋がりが無いからでしょう。同じ弁当でも店員さんは何も言わないですね、あれは繋がりを持たないように、あっ、セブンイレブンって固有名詞で、コンビニですね、失礼しました。

この間、家のおばあちゃん田舎から出て来まして、ファミリーレストランで店員さんが「こんにちは」って、おばあちゃん「おお、こんにちは」って店員さんびっくりしてましたからね。判ります？繋がっちゃダメなのですね、そんなふうな世の中になっちゃいましたけれども、そういう事をちょっと感じながら聞いていました。

二つの地域活動の発表を聞いて - 助言者よりのまとめ概要

(1)地域と人との関係が切れている、社会システムがそのようになってしまっ



いるとの思いがする。

(2)大人との関係から子どもが崩れる。子どもが悪いのではなく、むしろ大人のあり様が問われている、言い換えると、子どもたちは、人に思いを伝えて、関係を作ることが、非常に拙くなっている。世の中で必要なものは、大人としての態度、対応（黙って聞く）である。この対応で子どもたちは、また、考える。コミュニケーションとは、相手に対して発する想像力ではないのか。

(3)学校の閉鎖性が課題

教職（先生）は他者からの支援が少ない職業である。卒業以降すぐ、一人で、子どもを教えなくてはいけない。経験上無理な話で、サラリーマンでも一人前になるのに何年もかかる。地域との係わりが少なくなる。

(4)必要なものは

「場」が豊かになる教育、それは、人間関係の豊かさと多様性を認めること。

(5)教育面の条件整備

行政側の教育予算確保は年々厳しい。私たちが教育インフラを確保する為に、自己負担してでも、払うものは払うとの覚悟と認識を同じくすることができるかという、自分自身への問いかけでもある。